様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年６月２３日現在

機関番号：４２６９８
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：平成１９年度　～　平成２１年度
課題番号：１９４０１０１３
研究課題名（和文）モースコレクションにおける日本音楽資料の悉皆調査

研究課題名（英文）　A Comprehensive Survey of Materials Related to Japanese Traditional Music Found in the Morse Collection

研究代表者　茂手木　潔子（MOTEGI　KIYOKO）
有明教育芸術短期大学・芸術教養学科・教授
研究者番号：３０１７４３４５

研究成果の概要（和文）：
1877~1883 の間に 3 回にわたって来日した米人博物学者、E.S.モースが収集した膨大な日本文化資料の中から、伝統音楽に関する資料に焦点を当て、その種類、実態を調査した研究である。主な調査場所は、セーラム市(ボストン近郊)のピーボディ・エセックス博物館（PEM）、ボストン美術館（MFA）、カナダのバンフにあるホワイト美術館の３か所で、日本の楽器とその付属品、音具、楽譜、日本音楽に関して書かれた記述を収集整理分類した。研究の結果、現在日本では見られない楽器の存在や、来日当時の伝統音楽の奏演状況の詳細が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：
This research project focused on categorizing and ascertaining the condition of the materials and artifacts related to traditional music that are included in the vast collection of Japanese cultural materials collected by the American naturalist E.S. Morse over the course of his three stays in Japan, which occurred from 1877 to 1883. The primary research locations were: the Peabody Essex Museum (PEM) in Salem, Massachusetts, a suburb of Boston; the Museum of Fine Arts (MFA) in Boston; and the Whyte Museum of the Canadian Rockies in Banff, Canada. The objects that were collected, organized, and categorized included Japanese musical instruments and their accoutrements; sound-making implements; musical notation; and written records concerning Japanese music. Research results included a clarification of the existence of certain musical instruments that can no longer be found in Japan, and a greater understanding of the performance conditions surrounding traditional music that prevailed in Japan at the time of Morse's sojourn.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
１９年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
２０年度	1,700,000	510,000	2,210,000
２１年度	1,600,000	480,000	2,080,000
総　計	7,000,000	2,100,000	9,100,000

研究分野：人文学 B
科研費の分科・細目：美学・美術史
キーワード：E.S. Morse Collection, Peabody Essex Museum, Japan Day by Day, Catharine Whyte，日本の楽器，日本の音具，葛飾北斎，浮世絵の楽器，ボストン美術館，明治の日本の音風景

１．研究開始当初の背景
膨大なモースコレクションの日本初公開に関して、国立民族学博物館の故守屋毅教授が残した業績は非常に重要である。しか

し、E.S.モースの業績の中に、多くの〈日本の伝統的な楽器や音具〉の収集と、日本滞在当時の音環境の詳細な記録（日記『Japan Day by Day』）があることも見逃せない。日記の活字初版本には 777 点の図が描かれ、楽器図や演奏場面から、当時の音楽表現の様相が見えてくる。

また、モースの紹介で来日したフェノロサとビゲローが収集した同時代の浮世絵（ボストン美術館所蔵）にも、多くの音楽場面、楽器図が描かれ、特に、北斎の浮世絵の厳密ななぞ描写は、当時の日本の伝統音楽の実態を表すと考えられる。この点で、浮世絵は、欧米、日本で、音楽図像学の重要な対象となっている。この理由から、モースコレクション資料と浮世絵を重ね合わせると、19 世紀の日本の音楽状況が明らかになるのではないかと考えた。この視点は、筆者のオリジナルな視点でもある。

加えて、次の理由が本研究の背景にあり、本研究に着手することとした。

(1) 音楽学の観点からモースコレクションを研究した先行例がない。

(2) 筆者の先行研究に、浮世絵の楽器に関する研究（例：太田記念美術館主催『浮世絵の楽器たち』2005 年 10 月等）がある。

(3)日本文化の楽器と音具について、筆者は詳細な情報と、楽器コレクションを持っている 1 人であること。

(4) 研究協力者として、国内、国外の浮世絵研究者のネットワークを持つとともに、ドイツ、オランダ、アメリカ、カナダなど、海外の美術館学芸員との直接のネットワークを有しているので、現地での研究環境が整っていること。

以上を、研究の背景とし、研究に着手した。

２．研究の目的

(1)モースコレクションにおける日本音楽の楽器や音具を全て調査すること。
調査結果を広く公表し、モース研究の一助としたいこと。

(2)モース著『Japan Day by Day』の手稿に当たり、活字版出版時（初版は 1917）に省略された具体的な音に関する記述があるかどうかを確認すること。
後で詳述するが、この予想は的中し、多くの音文化に関する表現が削除されていることが明らかになった。
さらに、手稿の描画と活字本の描画の違いも多く発見し、特に、楽器図に違いがみられることも判明した。しかし、なぜ間違えて書きなおしたかの理由は、現段階（2010 年 6 月）では未詳である。

(3)ボストン美術館にてモースの友人、フェノロサやビゲローが収集した葛飾北斎作品に当たり、当時の音楽場面や楽器について視覚資料から分析し、モースコレクションの記述を視覚的に検証すること。

(4)近い将来、モースコレクションの楽器および音楽資料を日本公開するための第一段階としたいこと。

３．研究の方法

本研究の方法として以下の方法を取った。

(1)モース、PEM 関係の国内での資料収集
①国立民族学博物館の故守屋毅教授収集の PEM 資料の確認と守屋毅論文の収集。
②日本で既出版のモース関係書籍および、シーボルト、ケンペル等、明治初期までに来日した外国人の記述資料の収集。
③PEM の姉妹博物館である太田区立郷土博物館における Salem、PEM 関係資料入手。
④楽器を描いた浮世絵の中で、葛飾北斎に特化して欧米、日本の既出版資料を収集。
⑤MFA,PEM のインフォーマント情報の収集。

(2)モースと関連する海外の美術館調査
実施した調査日程等は、以下の通り
①2007.9/22-10/9　PEM, MFA 第 1 回調査
②2008.3/23-4/6　PEM, MFA 第 2 回調査
③2008.9/12-10/1　PEM, MFA 第 3 回調査
④2009.10/2-10/12 Whyte Museum 調査
⑤2010.2/20-2/28 オランダ博物館調査

上記の現地調査では、コレクション収蔵庫、図書室、および学芸員室にて研究対象資料調査の具体的な内容は、資料の書き写し、写真撮影、寸法採取、図の作成、モース関連新聞記事、モースの家系図、論文等のコピー入手。これらを今後の分析用資料とする。

PEM は、本研究の最も重要な調査機関であった。フィリップスライブラリー(PEM 図書館)と楽器収蔵庫にこもり、学芸員の協力で調査を行った。

MFA では、学芸員室にて博物館所蔵のフェノロサ、ビゲローコレクションより、北斎作品すべての現物を調査終了。

Whyte Museum では、所蔵のモースコレクションを調査。現在学芸員の協力により、E.S.モースの孫キャサリン・ホワイ

トの日本滞在記録を現代英語に翻刻中。終了予定 8 月。

オランダでは、ライデン国立民族学博物館、ハーグ市立美術館の浮世絵およびモースと同時代にもたらされた音楽資料を調査。

(3)学会発表による、研究の客観的分析と学芸員の招聘による講演会の開催。
Whyte Museum から館長と学芸員を招聘し、東洋音楽学会例会で講演を実施。筆者の研究報告も行い、研究の公開を試みた。
また、筆者自身は、海外公的機関からの招聘による講演で、本研究についての中間報告として、調査の内容を視覚資料と共に発表。

(4)筆者のホームページにて研究成果報告(日本語、及び英語）を 7 月末から公開予定。

(5)近い将来、都内のいづれかの美術館におけるモースコレクション日本音楽資料公開の可能性を、モースコレクション研究者と共同で模索する。

４．研究成果

今回の研究は資料調査を研究の目的とするため、資料調査の結果が、研究結果となる。そして、詳細な分析研究は、今後の継続研究の中で今年度中に筆者ホームページにて、日本語・英語両方で報告する予定である。

当初の目的の「悉皆調査」は完了した。ここでは、調査終了時点で明らかになったことを、研究結果として以下に記すが、初めに調査内容の概略を述べる。

(1)調査内容の概要

①写真撮影：楽器・音具、楽器部品及びミニチュア店舗など全日本音楽関連資料。
②モースの音楽記述部分の手稿コピー入手。
③モースの日本滞在時の新聞記事（日本語、英語）全てのコピー入手。
④モースの日本滞在時の手紙の手稿、日本人関係者とのやり取りの手紙の関係記事コピー入手（モースの遺言書も含む)。
⑤PEM 所蔵の日本音楽関係モースコレクションリスト（現地学芸員が筆者の研究準備のために作成してくれた簡易リスト)。
⑥Whyte Museum モース関連全資料リスト（現地学芸員が本研究のために作成）に添った所蔵品の確認。

(2)調査結果の概要

①音楽の視点からの初めての調査
PEM, Whyte Museum における調査を終了し、本研究が、音楽の視点からの最初の詳細調査であることが分かった。
モースの収集資料は、一般に邦楽の楽器とされるものの域をはるかに超え、日本の音文化の全貌を鳥瞰する豊富な音資料であることが分かった。この調査データを整理して、今年度中に PEM, MFA, Whyte Museum, 国立民族学博物館に寄贈の予定。

②PEM の楽器や音具コレクションには、日本未公開の多くの楽器資料があった。一部の楽器例は下記の通り。
また、『Japan day by Day』に描かれた楽器の実物も所蔵されていた。注目すべきは体鳴楽器のコレクションの多さで、中でも鈴の類が非常に多い。また、滞日中のモースに寄贈された楽器は、豪華で装飾性の高いものが多く(例：下記の象嵌の 13 絃箏)、お雇い外国人の待遇の良さがこのあたりにも表れていた。
しかし、この状態では演奏には不向きであり、演奏した形跡はないようだ。したがって、爪が見当たらないのかもしれない。

下左：蛙の形をした小型ドラ。バチ不明。
下右：独特の形をした神道鈴。

下：楽器を一本の満開の桜の木に見立て、全面に象嵌の装飾を施した 13 絃箏。爪は発見できず。

③Whyte Museum の資料例

この博物館におけるモースコレクションの特徴は、モースの寵愛を受けた孫キャサリン・ホワイトがモースから受け継いだ、7 点の精巧に作られたミニチュアの店舗である。その中に、下記の楽器店のミニチュアがあり、当時の東西音楽文化交流の様相が見て取れた。このミニチュアは、1980 年代のモース展で、虫売りなど、他のミニチュア店舗と共に一度だけ公開され、当時の新聞に情報が出ている。

Whyte Museum におけるモース関係資料は、多くの写真資料と手紙類、モースの研究論文の抜き刷り、モース来日に関する新聞記事、モース他界時の遺言書、手続き書類などで構成されているが、これについては、これまで、その存在もあまり知られておらず、2009 年イギリスで刊行されたデジタル資料にも採用されていない。したがって、まだ詳細な研究がない。
特に、キャサリン・ホワイトが日本滞在中に母親（モースの娘）に送った 100 通近い手紙は、モース来日後 50 年後に、モースの足跡をたどる内容となっており、日本の歴史の中で、音環境がどのように変化したかを知る実証的な資料となる。現在、現地学芸員により手書きの手紙を活字に翻刻中。

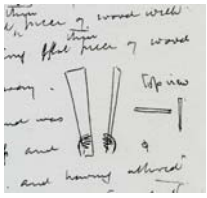
④オランダのハーグ市立美術館資料の中に、モースコレクションに類似した楽器資料があり、欧米人の日本の音文化への視点の共通点を感じた。また、同美術館学芸員と、今後のオランダ側と日本側との共同研究の可能性を共通認識した。

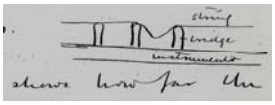
下写真２点はハーグ市立博物館調査資料である。Scheurleer 収集資料の一部。
上：明治時代の門付け明清楽(みんしんがく)
下：雅楽の鶏婁鼓(けいろうこ)

⑤PEM 図書館で『Japan Day by Day』手稿に当たり、以下のことを発見。
a) 手稿と活字本の楽器図に相違がある。(楽器以外の図の相違点も多い)

上左は手稿、上右は初版活字本
三味線の構え方など、左の原画が正しい。違えて描き替えられたのは何故か。原図と活字版の図は酷似している。初版時点ですでに描き替えられている点。モースが確認済みであることも不思議である。
楽器図、歌舞伎などの上演図のみならず、桶や台所用具などについての描き替えもある。
PEM の関係者はすべて、描き替えを認識していなかった。これを機会にさらに、現地調査を試みる予定。

b)手稿に記述された楽器で、初版本では削除された図もある。
例：下記左図は笏拍子(しゃくびょうし)。右図は龍笛か能管の指孔(ゆびあな)の部分のくぼみ方か。





他にも、草笛を吹く口の形の図など、日本の音文化に関するモースの関心は高い。そのおかげで、当時の音の環境がつぶさにわかる。

c)補足だが、Japan Day by Day の記述用に使われた用紙は、当時の日本の便箋だった。

⑥MFA における葛飾北斎のすべての版画における日本音楽の楽器・演奏場面の抽出を終了。タンバリンを持った女性たちの図もあり、当時の東西交流を絵から確認。モースコレクションとしては、音楽関係資料がないことも判明。
MFA では、筆者の訪問で北斎の浮世絵サーチ項目に「音楽・楽器」が追加された。

(3)残された課題
今回の悉皆調査を終えた時点で残された課題は、以下の通りである。

①PEM, MFA, Whyte Museum で収集した資料に関して、モースコレクションにおける楽器所蔵品のリスト完成（写真、寸法、寄贈年代、寄贈者名、楽器解説）
②翻刻されているキャサリン・ホワイトが母親(モースの娘)に宛てた手紙の日本語訳と公開。この手紙の分析を通じて、モースの日本滞在後、同じ場所での 50 年の日本の音文化の変化が明らかになるかもしれない。
③都内美術館におけるモースコレクション展示の実現
④日本語版『日本その日その日』全 3 巻の詳細な分析結果の公開。
コレクションの写真、日記の原版(手稿)、当時の新聞記事などを含めた総合的な視点で、「日本その日その日」の分析を実施し、論文発表したい。
⑤『Japan　Day by Day』の原図書き換えの理由の調査。
⑥「モースコレクション」の呼称の範囲に応じた、日本音楽関係コレクションの再分類。
モースコレクションには、E.S.モース自身の収集した楽器と、知人が収集した楽器、帰国後に送られてきた楽器など、いくつかの次元のコレクションで構成されているため。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
論文ではないのですが、学会発表の報告をあげます。

(1)茂手木潔子「何故、E.S.モースは『日本その日その日』の絵を描き変えたのか～モースコレクションにおける日本音楽関係資料調査報告～」査読なし「東洋音楽学会東日本支部だより第 22 号」pp.2-4　2010 年 3 月 3 日

(2) 茂手木潔子「The Survival of traditional Japanese Music in Our Contemporary World」査読なし「IAML（国際音楽資料情報協会日本支部）ニュースレター　no.31」（英文原稿）pp.9-12　2007 年 9 月 25 日

〔学会発表等〕（計 8 件）
(1)茂手木潔子　「Music Instruments in Kabuki and E.S.Morse Collection」国際交流基金ロンドン支部招聘講演③　エジンバラ大学視聴覚室　2010 年 2 月 26 日

(2)茂手木潔子「Unexpected Gems---Exploring the Sound Sources of Japanese Sound Culture----」国際交流基金ロンドン支部招聘講演②　国際交流基金ロンドン日本文化センター　2010 年 2 月 24 日

(3) 茂手木潔子「Sound and Musical Instruments in Ukiyoe」国際交流基金ロンドン支部招聘講演①　国際交流基金ロンドン日本文化センター　2010 年 2 月 23 日

(4) 茂手木潔子，Michale Lang，Lynne Huras「何故、E.S.モースは『日本その日その日』の絵を描き替えたのか～モースコレクションにおける日本音楽関係資料調査報告～」「ホワイトミュージアムとモースコレクション」「もうひとつの日本その日その日　E.S.モースの孫　キャサリン・ホワイトの手紙」東洋音楽学会東日本支部第47回定例研究会　2009年12月5日　東京芸術大学音楽学部 5-301 教室

(5)茂手木潔子企画監修・解説「歌舞伎の音楽」ワークショップと公演　PEM 主催 PEM モースホール　2008 年 9 月 24 日，27 日，28 日の計 3 回。　ニューイングランド音楽院主催、同大学ホール　2008 年 9 月 29 日
（モースコレクション調査を行った PEM の依頼で、コレクションにある太鼓、大小鼓、竹笛、その他の歌舞伎楽器との関連させた演奏会を企画監修。ニューイングランド音楽院でも同内容で実施）

(6)E.S.モースが聴いた日本の音～モースコレクションにおける日本音楽資料悉皆調査の中間報告」平成 20 年度日本教育大学協会北陸地区音楽部門研究協議会 2008 年 10 月 15 日　上越教育大学音楽棟 102 教室

(7) 茂手木潔子「〈めいめいの音〉から生まれる豊かな響き～歌舞伎の楽器と **E.S.**モース・コレクション～」現代文化研究会４月例会　上越市雁木通りプラザ 2008 年 4 月 24 日

(8)茂手木潔子「The Survival of Traditional Japanese Music in Our Contemporary World」IAML（国際音楽資料情報協会）シドニー大会　シドニー音楽院　2007 年 7 月 5 日
（本調査に着手する経緯について発表し、世界の資料情報を有する研究者からの情報収集を試みた発表。）

〔図書〕（計０件）

〔その他〕
ホームページ等
http://kiyoko-motegi.com/index.html

６．研究組織
(1)研究代表者
茂手木　潔子（MOTEGI　KIYOKO）
有明教育芸術短期大学・芸術教養学科・教授
研究者番号：３０１７４３４５

(2)研究協力者
本研究では、下記の現地学芸員の大きな協力の下に、研究目的を達成できた。

①PEM 調査研究協力者
Midori　Oka
元 PEM・日本部門学芸員

Gelard　Marsella
元 PEM・日本部門学芸員

圭子セイヤー
PEM・非常勤学芸員

②MFA 調査研究協力者
永田 生慈(NAGATA SEIJI)
墨田区北斎館建設準備推進監

Dr.　Sarah Thompson
MFA・　アジア・オセアニア・アフリカ美術部・日本美術課・浮世絵版画室・室長

③Whyte Museum 調査研究協力者
Dr.　Michael　Lang
Whyte Museum 館長

Lynne Huras
Whyte Museum 学芸員

④オランダの調査研究協力者
Dr.　Matthi　Foreer
ライデン国立民族学博物館・学芸員
ライデン大学・客員教授・葛飾北斎研究

Drs.　Onno　Mensink
ハーグ市立美術館・学芸員
音楽図像学、北斎研究

⑤他の調査研究協力者
横山 正(Dr. YOKOYAMA TADASHI)
東京大学・名誉教授
元情報科学芸術大学院大学・学長
守屋毅関係資料収集のサポート

David　Crandall
翻訳者 能楽研究・シカゴ在住
PEM 調査協力

前原 恵美(MAEHARA　MRGUMI)
有明教育芸術短期大学・芸術教養学科・講師
PEM 調査協力

小川 美紀子
公立小学校教員
ホームページ制作担当